

化学教育 徒然草



化学教育と化学史

KOHNO Toshiya

河野俊哉

東京大学大学院教育学研究科研究員／暁星学園教諭
化学教育ディビジョン幹事／環境安全推進委員会環境教育小委員会委員



巻頭言

日本銀行は2024年度上半期を目途に紙幣のデザインを一新し、千円札のデザインには北里柴三郎の肖像画が使用される予定である。しかし、北里が第1回のノーベル賞候補者であり、当時既に「世界の北里」であった割には、私の周囲の学生や一般の認知度は低いように感じられる。やはり現在一般にはノーベル賞を受賞したことによってその科学者が認知され、知名度が上がっていくのが常だからであろう。本誌の中心学問分野である「化学」に対象を移した時、ノーベル賞と関連性の低い櫻井錠二、柴田雄次（他にも例を挙げるなら宇田川榕菴、ダイバース）の認知度はさらに下がるのではなかろうか。

そもそも我々が会う化学史の多くは西洋化学史が多い。本誌に4回ヘッドラインで特集を組ませてもらった際にも多くは西洋化学史がテーマだったが、幸いにも編集委員・読者の理解に支えられて好評を博し、それらを中心に書籍化した著作も出版不況と言われる昨今の割には増刷され、電子版も出版され、いずれは韓国版も出版される予定である。取りまとめを担当した者としては冥利に尽きる話である。その一方で今回は日本の化学史特集を組むことにした。と言うのもノーベル化学賞受賞者数から見れば、日本の化学は世界でもトップレベルであり、近年では受賞者が出ることは珍しい出来事ではなくなっている。しかし研究者の中には、その成果は一昔前の基礎研究の成果であり、基礎研究を軽視しがちな日本では今後の成果が期待できないと憂慮されている方もいる。このような問題に日本で最も早くから関わったのが櫻井であり、東京大学理学部化学教室の初期の伝統である「化学教育に化学史を取り入れた授業」を展開したのも櫻井であった。そしてその伝統を受け継ぎ本誌創刊に尽力したのが柴田、日本独自の研究を推進した御雇い外国人の一人がダイバース、時代はもっと遡るが単なる翻訳ではなく多くの蘭書を紐解き、場合によっては実験までして現在にも繋がる日本独自の化学を創造したのが宇田川榕菴である。日本化学史には多くの先人の労苦と知恵が眠っているのである。それを教科書の巻末や年表に落とし込んだ授業ではなく、高校・大学を問わず、日本の化学史を自然に語れる授業を目指したい。ヘッドラインの本特集「日本化学史」がそのような際の道標となればそれに勝る喜びはない（吉野彰氏によるノーベル化学賞受賞の歓喜の中で）。

[連絡先]

102-8133 東京都千代田区富士見1-2-5（勤務先）